

レンゲ畑で遊んだ日のことは…

千葉県流山市 伊藤 篤志

「この駅に来るのもこれが最後だ…」

金曜日の午後。湾岸のコンビニナートへの日帰り出張の帰り、改札を入りながらふと思った。化学工場に納入した装置の試運転が無事完了したその日、私は内房線の五井駅から電車に乗り、茨城の勤務先工場に帰るところだった。

隣のホームでは、あの車両が発車を待っていた。黄色と赤のメルヘンな配色。案内板に『小湊鉄道』とあった。どこへ向かう路線なのかは不明だ。この一週間、朝夕この駅を利用するたびに、ちよつと気になっていた。

一両編成の列車。一両だけでも列車と呼ぶのか知らないそれは、電車ですらない。私は、東京近郊にまだ非電化の路線があることに驚いたが、それ以上に、昔の映画から飛び出してきたような古めかしい車両に、郷愁の念を抱かずにはいられなかった。子供の頃、故郷を走っていたローカル私鉄線に雰囲気が似ているのだ。

「この時間だと会社に戻っても退社時刻後だ」

今週は月曜からずつと、早朝に家を出て夜遅くに帰宅する毎日だった。その仕事も終わり、もうあたふたすることは何もない。今日は完了報告と挨拶まわりだけだったから荷物もほとんどない。

こんな機会はどうあるものではない。私は、思い切って今日の午後は「有休」にして、あの黄色い車両に乗って見知らぬ土地への小旅行とシャレ込むことに決めた。特に目的はないが、四月の陽は案外長い。車窓から房総半島の春景色を楽しめるだろう。

終点までの往復切符を購入して、レトロな車両に乗り込む。缶ビールを三本、駅ナカのコンビニで買い込んだ。まだ昼間だから他の乗客からは見えない、端っこの窓寄りの席に腰掛ける。発車までは時間があるが、列車が駅を離れるまではビールに手を出さない。何となくそうしないと気分が悪い。動き出すと同時に栓を開ける。そして、駅が段々と遠ざかっていくのを見ながら飲み始めるのである。

走り出した列車は、ほどなく市街地を抜け、窓の外は田園風景に変わる。ディーゼルは平野の中を軽快に走っていく。田んぼの中に、ポツポツ家が散らばっている。故郷もちよつとこんな感じだった。私は窓からの景色を眺めながら最初の一杯を空けている。

線路は平野を抜けると、徐々に『日本昔ばなし』風の里山の景観の中を走るようになってくる。タイムマシンに乗って過去へ時間をさかのぼっている錯覚に陥りそうだ。

ふいに、見覚えのある田んぼが、目の前に現れて私は「あつ」と小さな声を上げた。

レンゲの花畑がそこにあった。

何十年かぶりのレンゲ畑との再会だった…。

今から半世紀前の日本の水田稲作地帯には、春になると一面のお花畑が出現した。レンゲ草の花畑である。私の生家の周りも、

毎年四月になるとレンゲの花で、紅紫色に彩られたことを思い出す。かつては日本のどこでも見られた、ごくありふれた風景。だが最近では、めっきり目にすることもなくなった。

レンゲ畑そのものは、今も日本の各地にある。しかしその多くは、観光レンゲ園だ。景勝用であり、写真映えの撮影スポットとして、地元の人たちが整備しているものだ。大都市近郊のレンゲ畑は、都会からの観光客にも人気らしい。それは結構なことだし、立派な取り組みだと思う。

だが私は、きれいに作り込まれたそんなレンゲ畑に、かすかな違和感を覚える。訪れた人が喜んでいるのだから良いではないか、という思いもある。でも、私にとってレンゲとレンゲ畑は、もっと身近にあつて素朴で実用的な存在だった…。

思いがけず目にしたレンゲ畑は、広いものではなかった。すぐに通り過ぎてしまった。列車は森を切り開いた細いすき間をゴトゴト進んで行く。

私のビールも三本目に取り掛かる。飲みながら、十秒で通り過ぎたレンゲ畑のことを思い出していた。

私の生まれ故郷は中部地方の小さな町だ。今でこそ、隣接する大都市のベッドタウン―ピカピカの住宅地だが、私が小学生だった昭和四十年代には、まだ見渡す限りの水田が広がっていた。そしてここが私たちにとって、もっとも手近な遊び場だった。水が張られた田の周りの用水路は、子供に人気のアメリカザリガニの、格好の釣堀だったし、秋になり稲ワラが片付けられると、今

度は休耕田が丸ごと広場として開放された。さらに季節が進み、レンゲ草が花をつけたのが、さつき見たお花畑の光景だ。

この短い期間に、どんな遊びをしていたか定かでないが、たぶん鬼ごっこの類であつたろう。走り疲れて草の上に倒れ込み、青空を見上げたのがとても気持ち良かったことは今も思い出せるのだ。

当時の遊び仲間は、年の近い幼なじみ四人だった。そう言えば、あの連中とは大人になってから一度も会っていない。

「皆々、元気にしているだろうか…」

酔いのせいかな、今日の私は、なんだか純情になつていようだ。お花畑の中を走り回つて、レンゲ草をなぎ倒して遊ぶことに罪悪感は無かつた。田んぼは、他ならぬ私の祖父のそれだったし、踏みつけているのは、何の役にも立たないただの草、だったからだ。だが、実際はだいたい事情が違つていた。

私はレンゲという植物は、どういう訳か田に根付いていて、放つておいても春になると自然と生えてくるものだと思つていたので、ある時祖父から、

「あれはよお、秋に種を蒔いてとるんだて」

と教えられ、大そう驚いた。レンゲ草は田植えの前に、そのまま土の中にすき込んで土壌を肥えさせるための天然の肥料、緑肥だった。何のことはない。農家が米の収穫を上げるためにやらねばならない農作業のひとつだったのだ。

祖父の農作業は、小学生の時に一度だけ手伝つたことがある。刈り取つた稲を干し竿に架ける作業だった。初めて経験する農業

は物珍しく楽しかったが、ワラくずが服の下に入って肌を刺すのが痒く、その旨をしきりに祖父に苦情した。全く、つまらぬ事を言うものだが、かように辛抱が利かない上に不器用な子供だった私のことだ。ほとんど助けにはならなかったと見えて、農作業の手伝いはそれきり、二度とお呼びが掛かることはなかった。

こんな農業不適合の孫だったから、自分の祖父がせっせとレンゲ草の種を蒔いていることを知る由もなかったのだ。

「この子は、ほんなことも知らなかったか？」

と、祖父はさぞ落胆したことだろう。その時の祖父の表情は、さすがに記憶に残っていない。でもきつと、怒るでも笑うでもなく淡々としていた筈だ。

同じ町内に住んでいた、この母方の祖父はいつもそんな調子で、あまり感情を表に出さない人だったのだ。戦時中、もういい年になってから兵隊に取られて、軍隊では苦勞もしたに違いないが、本人の口から戦争の話は一度も聞いたことはなかった。

戦後しばらくして、農業の収入だけでは人並みに暮らしていけなくなると、隣の病院で送迎バスの運転手をして月給―現金収入を得るようになった。病院を定年になった後は、畑仕事のかたわら、シルバー人材センターで紹介された仕事に精を出していた。

連れ合いの祖母はと言えば、祖父とは逆に、そそっかしく喜怒哀楽のはっきりした人だったが、いつ会っても私には優しく喜ぶ。

祖父も祖母も、およそ遊びとか贅沢には無縁の人だった。私は祖父母が生活必需品以外にお金を使っているのを見たことがない。

たまに週末、私がお泊まりに行った時には、毎回判で押したように、近所の魚屋で買ったウナギのかば焼きでウナ丼をこしらえて夕飯に出してくれたものだが、恐らく子供が喜んで食べそうな物を他に知らなかったのではないか。泊まりに来た孫にはご馳走を食べさせてくれたが、自分たちはいつも通りの粗食だった。

二人とも、役所や役人のことを信じきっていて、面倒なことは一切言わなかった。お金を出して店で飲み水を買うなど、祖母が生きていたら腰を抜かすだろう。簡潔明快だった祖母の、

「水道ちゅうのはよお、ちゃんと飲めるようにしてあるがね」

という声が聞こえてきそうだとにかく、見栄とか建前とかよりも、実を取る人たちだったのだ。

もつとも、私の祖父母だけが特につましい暮らしをしていた訳ではない。まして、自分の祖父母が他人様に比べて立派だった、などと言うつもりもない。むしろ祖父母は、その当時の日本のどこにでも居た、ごく普通の老庶民だったに過ぎない。

それこそ、田んぼに咲いたレンゲ草のように。

学も才も無かったが、それだからこそか、穏やかなとても良い顔をしていた。ああいう「良い顔」のお年寄りを近頃見ることが少なくなった、と思うのは、私の気のせいだろうか？

戦後に育った現代のお年寄りは、権利意識が高く、自己主張にも熱心だ。祖父母のような、お上に従順で質朴なお年寄りは今では絶滅危惧種だろう。それは決して悪いことではない。私にしても、祖父母のような暮らしをこれから先、死ぬまで続けられるかと問われたら自信は無いのだ。

誰が詠んだか、

「手に取るなやはり野に置け蓮華草」

という句がある。蓮華草を引き合いに、取るに足らない者を表舞台に出すものではない、と諫めたものだ。

俗な表現だが、あれはとてもいい言葉だ。レンゲなど、田んぼから切り離して床の間に飾ったところで、何の足しにもならぬ。所詮レンゲ草は、田んぼ花畑で沢山の仲間と肩を寄せ合って風に吹かれているのが分相応というものだろう。

祖父も、ちょうどそんな人たちだった。一度も晴れがましい場に出ることは無かった。引っ張り出したら本人たちが迷惑したろう。

控え目で、地位とか富貴とか華やかさとは無縁の大衆。だが、平凡に無名に生きるのは素晴らしいことだ。

私も、そのことがよく分かるようになった。それだから、写真映えのための観光レンゲ園に違和感を覚えたのだ。レンゲは身近にあつて、ただ静かに咲いていればそれで良いのだ。

息を切らして走り回った祖父のレンゲ畑は、子供には遊びきれないほど広がった。でも、今にして思えばそんな筈がない。祖父の田んぼは、戦後の農地改革で分けてもらった、ささやかなもので、米づくりだけでは暮らしが立たなかつたのだ。

きっと私たちは、他家の花畑まで荒らして遊び回っていたのだ。それで文句を言われることもなかつた。レンゲ畑は万事におおらかな時代、春の訪れと共にやって来る移動遊園地みたいな場所だった。

私たちは幸運だったと言える。根っこに窒素を貯め込む性質を持った、健気なレンゲ草を農家が計算づくで植えていたのが、一面のお花畑の正体だった。

私たちが成長して、田んぼや用水路を遊び場として必要となくなるとの待つていたかのようにレンゲの緑肥は化学肥料に置き換えられてゆき、気が付くと周りにレンゲ畑を見ることがもなくなった…。

やがて列車は、養老溪谷駅に停車した。有名な観光地だが、地名の『養老』の由来は知らない。親孝行伝説でもあるのだろうか。「ろくに祖父母孝行しなかつたな…」

チクリと胸が痛む。気楽な旅はいつしか感傷旅行になっている。孝行するどころか、大学進学を機に家を出てからは、祖父母に会うことも年に一度きりになっていた。

私が、その遠くにある大学に合格した時には、二人ともとても喜んでくれた。とりわけ祖父の喜びようは尋常でなく、後で聞いたら、

「孫が帝国大学に受かった」

そう言って、隣近所に自慢して回ったという大げさなことをと、家族は呆れたが私には思い当たる節があつた。

祖父は小学校の頃、勉強が良く出来た。「兄貴の通知表はいつも全甲——今風に言えばオール5だったよ」と、何かの折に大叔父が教えてくれたことがある。話半分としても秀才だったのだ。そ

れでも上の学校には進めなかった。貧しかったからだ。

孫の自慢をする祖父の脳裏には、眉を上げ、さっそうと歩いてきた昔の帝大生の姿でも浮かんでいたのであろうか？

普段の祖父らしからぬ振る舞いに私は苦笑もしたが、これでも少しは、いいことをしたことになるのかなと思つた。

こんなことを孝行とは言うまい。結局、私は祖父母に何もしてやることはできなかった。

祖父母はレンゲ畑より、やや長命した。祖父が亡くなったのは三十年ほど前、ちょうど八十歳の時だった。いつも通り、シルバードでもらつてきた、道ばたの雑草刈りの仕事をしている最中に胸が苦しくなり、帰宅後そのまま息を引き取つた。一応、死因は心不全ということだが、要は天寿を全うしたということだろう。人間、死ぬ時は心臓が止まるとしたものだ。

金に困つていたわけではない。「あんな年になるまで、亡くなるその日まで働いていた」というのが、いかにも祖父らしいと思つた。

残された祖母も四年後に、ぽっくり逝つた。この人も最期まで、病院や施設の世話になることはなかった…。

終着駅に着いた時には、陽もすっかり傾いていた。薄暗いホームに降りて、乗ってきた列車を振り返る。年季ものの車両。たった一両の車内はガラガラだった。どうやら経営は楽ではなさそう

だ。
あの小さなレンゲ畑は、観光用には見えなかった。察するに、

あれは小湊鉄道の私設応援団の作業だ。乗客の目を楽しませるための沿線農家の出血サービス。レンゲ農法というのは存外手が掛かる。

単線の非電化路線と共に暮らし、ひっそりと支える人々が居ることを私は知つた。

「愛されているのだなあ、この鉄道は」

私の知らないところで、ひとりレンゲの種を蒔いていただろう祖父の後姿を、その一瞬見たような気がした…。

本当を言えば、私の回想の中のレンゲ畑は、もう明瞭な像を結ばない。昔のこと過ぎるのだ。往時をしのぶつてもない。毎年遊んだレンゲ畑だが、写真一枚残っているわけではないのだ。それはそうだ。レンゲ畑の写真を撮るなど、考えたこともなかった。でも、「近くにある」とはそういうことだろう。

レンゲ畑で遊んだ日のことは、懐かしい人々―祖父母や幼なじみとの思い出と共に、今では私の記憶の中だけにあり、それも年々薄れていつている。

そのことが、少し、寂しい。

どこからか、折り返しの出発案内が、聞こえてきた…。